

# 農業と科学 1976 5

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO LTD

## カリフォルニアの農業と

## 生活から考えたいこと

愛知県田原農業改良普及所

水口文夫

### 驚くべき収量の高さ

物の本によれば、単位収量の高いことは日本が世界一で、アメリカは日本の6分の1だなどと書かれている。アメリカ合衆国カリフォルニア州の農業を、直接目でたしかめるまでは、大規模な企業的農業であるから、労働生産性は高いが、土地生産性は低いと思っていた。だが、カ州で直接農家に接し、作物を手にとってみて、今までの考え方が間違っていたことに気付くと同時に、カ州の農作物の収量の高さや品質のよさに驚いた。

たとえば、エド・ウイレリ・センス氏は、1,120haの水稲と120haの加工トマト、240haの小麦、140haのコーンを栽培、米の10a当たり平均収量は540kgである。また加工トマトは機械収穫のために、1回収穫で10a当たり9tの収量である。

これは決して、1農場だけの特殊な例ではない。320人の組合員を有し、稲作作付面積5,888haのビュッテ郡米作生産者組合員の平均10a当たりの収量は607.5kgと高い。

またモンテレー郡のハンセン氏は1,200haにレタス、ブロッコリーを作付しているし、ブルース、チャージャー社は800haのレタスを栽培しているが、レタス10kg箱換算の収量は10a当たり250~350箱である。

次表は、日本の農林統計とカ州食糧農業局統計資料をもとに比較したものであるが、その収量の高さがおわかりいただけると思う。

### 目先きをねらうか、根本まで考えるか

なぜカ州の農作物の収量が高いのだろうか。収量の高い原因はいろいろあるが、ここでは農民性を考えてみたい。

農家や指導者と接して、問題の解き方に、日本と差があるように思えてならない。

たとえば、スイカやトマトの実のつきが悪い場合に、日本では、ホルモン剤をかけて実のつきをよくしようと

する。ところがカ州の人達は、実のつきの悪い原因を徹底的に追求する。そして生産の基盤までさかのぼって問題を解決しようと努力する。日本では、目先き対策があまりにも中心になり過ぎていないだろうか。

### 土をかきまわすのか、耕すのか

日本では田畑を鋤きおこすと云えば、耕耘機か、トラクターにロータリーをつけての作業が大部分である。

耕耘の深さも12cmくらいで、土をかきまわしているに過ぎない。どう考えても耕すとは云えそうにない。しかも1区劃が30a以下と小さいのに、位置によって耕土の深さがちがう。ときには耕耘されない部分があったりする。

ところがカ州でトラクターによる耕起作業は、殆んどプラウである。プラウで同一の深さに均一に土を反転している。その深さは40cm以上もあり、耕土が均一で非常に深いから、根の張りもよく、ムラできしていない。

### 湿害から抜け出すために

カ州では、4月から10月まで殆んど雨が降らない。そのために夏枯れと云って、夏になれば草は枯れ、山ハダは赤茶けてしまう。作物はそのまゝでは生育しない。家庭の芝生も街路樹も水をやらなければ枯れてしまう。この悪条件を、大規模な灌漑事業によって克服し、荒野を

### <目次>

§ カリフォルニアの農業と生活から考えたいこと	(1)
愛知県田原農業改良普及所 水口文夫	
§ 経営拡大や複合化で農業再建へ足がかり	(3)
<50年度の農業白書から>	
§ 三保の施設園芸とコーティング肥料の肥効	(5)
静岡県中部農業改良普及所 清水 支 所 滝田 健	
§ 茶の被覆栽培と寒冷紗の効用	(7)
鈴鹿市農業協同組合農産課 谷沢 義一	

沃野にかえている。

カ州の年間降雨量は、サリナスで355.6mm、サンディゴで264mmである。日本の降雨量1,500mm~2,400mmと比較すれば大変少ない。

タリーの爪など早く使用できなくなる。

草刈機と間違えているのでは？これでは能率も上らない。故障も生じやすくなる。第一、ロータリーは馬力を喰う作業機である。

日本とカ州の農作物の生産量と単位収量の比較 (1973)

作物名	作付面積		生産量		10a 当り収量	
	日本	カ州	日本	カ州	日本	カ州
米	2,622,000	160,400	12,149,000	1,129,000	463	563
イチゴ	13,600	3,240	184,400	160,000	1,356	4,940
レタス11~3月	4,590	15,000	70,700	431,300	1,540	2,875
4月~5月	2,280	13,560	43,100	474,600	1,890	3,500
6~10月月	5,000	28,080	112,200	840,800	2,244	2,959
セルリー	648	7,600	28,600	538,800	4,414	7,089
ニンジン	23,300	13,640	471,400	491,500	2,023	3,603
ホーレン草	22,000	4,440	332,600	100,000	1,512	2,250
クマネギ	29,000	11,280	993,900	377,700	3,427	3,349

備考：カ州は州食糧農業局資料より。米は玄米換算。日本は農林統計による。

日本では、6月は梅雨期で、この頃に雨が多くと、スイカや露地メロンは湿害のために、つるは早く枯れ上がる。また秋は霖雨と云って、これまた雨が長く、キャベツ、ダイコン、ハクサイなどの秋野菜が湿害を受ける。

豪雨などにより、ガラス室やビニールハウス内にまでも水が浸入する。湿害、また湿害である。

畑の区割は大きくなったが、ほ場内の排水施設はゼロである。

雨が降れば畑にトラクターが入れない——作業がおくれる——収穫量が不安定となる。

農業では栽培適期を逃がしたのでは、生産が上らないことは申すまでもない。

湿害を受けない耕地への改良、雨が降っても早くトラクターによる作業ができるような、土地基盤の整備が重要であろう。

トラクターを35年間も使う

農機具を大切に使っている。私の訪問した農家では、35年も前に導入したトラクターが農場で活躍していた。

トラクターはどんどん改良されているから、“35年も昔のものは能率が悪いではないか”と聞くと“35年前のトラクターと今のトラクターとどこがちがうのか、それは外見だけで、内容は変わっていない。”とのことであった。

トラクターを長もちさせるコツは、“作業に適した作業機を選ぶこと、トラクターに関する知識、技術をもつこと、長く部品が供給されることだ”という。

日本のトラクターの使い方は、背丈ほどもある草が立っているままロータリーで耕やしている。だから、ロー

その作業機で、最も多く馬力を必要とする耕耘作業を行うのだからムリが多く、従って機械の寿命を短くする。ロータリーは土を砕く作業機である。土を砕く作業機で耕起するのだから、土がよくなるがはずはない。

実質を尊ぶ

青果物市場に出荷されている野菜の包装荷造りは実質的であった。レタスの出荷箱は、ワクにベニヤ板が張り付けてある

だけだし、メロンはダンボール箱にワクを入れているのみで、日本のように高級紙にメロンを1個、1個包み、下敷きを入れたり、色紙を入れるようなことはなく、あくまでも荷いたみせずに、輸送を上手に行うことを中心に考えられていた。

自給に自信と誇りを

日本では、インスタント食品が流行している。農家でありながら、漬物や惣菜、野菜までも買って食べている。

忙しいということを買う。買うから現金支出が多くなる。だから、お金を求めて更に忙しく働く。

私達が訪問したカ州の多くの農家は、屋敷内に鶏が放し飼いされ、自給菜園をもち、卵や新鮮な野さい、果物を自給していた。そして“これは自分が作ったトマトだから、新鮮な卵だから、自家製のアイスクリームだから”と自信と誇りをもち、手づくりの味を楽しんでいた。

私達の今の生活は、あまりにも機械的な味気のないものになっていないだろうか。

家庭で精魂こめてつくった食物こそ、大切ではないだろうか。経済合理主義の考え方が、家庭生活まで及ぶことは大きな問題である。